

---

# ラベンダーの香り

Mu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラベンダーの香り

### 【Nコード】

N2229D

### 【作者名】

Mu

### 【あらすじ】

放課後の理科準備室。香るラベンダー。巻き込まれる少年。幼なじみの少女。過去と未来。出会いと別れ。恋と青春。そして、タイムリープ（時間跳躍）。そう、これは、「時をかける少女」へのオマージュです。

## Ⅰ 1 - (前書き)

アニメ版「時をかける少女」を観たら、ずっと昔に観た知世ちゃん  
の映画を思い出しました。

そうしたら、自分でもそんな話を書いてみたくなっていました。  
だから、これは、M U 版『時かけ』です。  
どうぞ、よろしく。

ホームルームが終わって、朝倉慎也は鞆を引つ掴むと、クラブに行こうと腰を上げた。

その時、教壇を下りかけた担任が、メガネの端をあげながら、こういった。

「ああ、日直の人、このノート俺のところまで持って来てくれ」  
教壇の上には、クラスのみんなの連絡ノートが積み上げられている。

「今日の日直、誰だ？」

誰かが声を上げる。

「慎也だよ」

近くで声をかけられた。

朝倉慎也が振り返ると、にこにこしながら、女の子が慎也を指差している。

「まじかよ?!」

「もう帰る時間なのに知らなかったの、慎也？」

「うっ」

「あゝ、日直の仕事しなきゃダメじゃない」

「悪い、みゆき、幼なじみのよしみで、やっといてくれ」

「えゝ、やだよ。かわいい女の子に、荷物持たすつもり？」

そこで慎也は、改めて少女を見た。

ボーイッシュなショートヘヤーで、健康的な小麦色の肌をした少女。

幼なじみの紺野みゆきは、バスケットボール部のエースである。

「誰が、かわいい女の子だっ？」

言っただとたん、慎也のお腹に衝撃が走る。みゆきの鞆が容赦なくぶつけられていた。

「痛ってゝ！なにすんだよ」

「幼なじみに対して、言っていないことと悪いことがあるでしょ」

「いや、事実だな…」

みゆきが鞆を振り上げる。

「うわ、暴力反対！」

慎也が両手を上げた。

「なによ。つべこべ言っていないで、日直の仕事しなさい。わかった？ 慎也」

慎也は、ヘーイと返事をして、

「じゃあな。クラブ終わったら、またな」

とみゆきに告げて、教壇に向かって歩き出した。

みゆきは、その後ろ姿をしばらく見つめてから、教室をあとにした。

「せんせー。持ってきたぞ」

慎也は両手にうず高いノートを持って、理科室の扉を足でこじ開けた。

がらんとした理科室には誰もおらず、返事は帰ってこない。

「えーと、いないのか？」

そこで慎也は思い出した。

「そうか、準備室だったな」

そのまま理科室を通り抜けると、苦勞して理科準備室の取っ手を回して、部屋に入った。

入った途端、部屋に漂う香りに、慎也は一瞬動きが止まる。

「あれ？この匂い？」

それは、慎也の記憶によく覚えがある香りだった。

脳裏に、幼なじみのみゆきの家の庭に咲く、薄紫色のラベンダーの花が広がった。

幼い頃はよく遊びに行つて、春の庭でその香りに包まれながら、みゆきと遊んだ。

そんな忘れていた記憶が、慎也の中に蘇る。

でも、なんで、こんなところで、ラベンダーの香りなんだ？

慎也は不思議に思いながら、準備室の中に歩を進めた。

ごちゃごちゃとして見通しの悪い準備室の中を少し奥にはいると、テーブルの上でなにやらガラス器具の中の液体から、ぷくぷくと泡が上がっている。

ラベンダーの香りは、そこからするようだった。

「なんだ〜？」

慎也は、少し興味を持ったのと、両手に抱えたノートをおくために、そのテーブルに近づいた……時だった。

つるつと足が滑った。やべーと頭の中で思った時には、体制が崩れていた。

慌てて手を使おうとして、ノートを持っていたことが災いした。

ノートが派手に宙に舞い、目の前の視界を遮る。

慎也は闇雲に腕を振って、何かに当たったと思ったときには、ガチャーンという派手な音が聞こえた。

掴まるものもなく転ぶ慎也の体に、テーブル上の液体が容赦なく降り注いだ。

「うわあー」

勘弁してくれよ。

と心の中で叫んだその時、慎也は奇妙な感覚に陥った。

背中から転んでいつて、すぐに床にたたきつけられるはずなのに、いつまでたっても床に着かない。

自分がいつまでも落ちていく感覚。視界が歪んで、いつの間にか、ホワイトアウトする。

呆気にとられる意識の中で、慎也は信じられないものを見た。

いつの間にか自分は屋外の土の上に横たわっている。

目の前で、信じられない速さで、高層ビルが何本も何本も立ち上がり、また崩されていく。

かと思うと、いつの間にか大平原のただ中で、遠くに雷鳴のよう

な音を聞いたと思うと、瞬間に音は大きくなり、大地をとどろかす歓声と共に、甲冑を身につけ馬に乗った何千人という人々が駆け抜けていく。

まるで、戦国のどこかの合戦のようだった。

これは、夢か？ 慎也は思った。

俺、頭うつて、気を失つて、夢を見てるんだな。そうに違いない。ただ、耳に届く歓声が、頬を撫でる風が、鼻に匂う大地の香りが、夢とは思えない臨場感を伴っていた。

ほら、騎馬の後ろから、無数の徒武者が近づいてくる。みんな殺気立った興奮した表情で……

飲み込まれる！

と慎也は思った。

その時、急にホワイトアウトした背景が戻ってきて、どすんと床にたたきつけられた。

わああ。

徒武者を避けようとして顔の前に交差させた腕に、バラバラと、何かが落ちてきた。

さっき放り投げた、ノートだった。

「痛つて〜」

強打した背中と、ノートで打った腕から胸が、酷く痛んだ。

慎也は背中をさすりながら体を起こすと、あたりの床を見回す。

床には、ノートと割れたガラス器具が散乱していた。

「やつべー」

慎也がそう呟いたとき、がたんという音が聞こえた。

ハッとして振り返った先で誰かが準備室の扉から駆け出していくのがチラッと見えた。慌てて慎也は、声をかける。

「あ、これは、事故だから。わざとじゃねえよ……」

しかし、誰も戻っては来ない。やれやれと思って立ち上がった。

「しかたねえ。片づけるか」

そう言いながら、慎也は、さっきチラッと見えた姿を誰だろうと

考えてみた。

しかし、男だったのか女だったのかさえも、思い出せなかった。



クラブを終えて、肩に鞆を提げながら、慎也は駐輪場に向かっていた。

校舎裏に抜けると、大半の生徒たちが帰宅して自転車もまばらになった駐輪場で、誰かがうずくまっているのが見えた。

あれ？と慎也は思う。

チラッと見えた横顔。みゆきか？

慎也は近くまで行って声をかけた。

「なにやってんだ？」

少女が顔をあげる。

驚いたような、ほっとしたような、複雑な表情になった。それから、急に顔をしかめる。

慎也は、少女が押さえている足首に白い包帯を見つけた。一瞬、顔を曇らす。

「どうした？怪我か？」

「うん。クラブでドジっちゃった」

「へえ。珍しいな、おまえがドジるなんて……」

少女が眉を上げる。

「どういう意味よ？」

「いや、いつもは沈着冷静だからなあ、おまえ」

みゆきはふんといつて、横を向くと、小さな声で呟いた。

「誰のせいだと思ってるのよ……」

「うん？なんか言ったか？」

慎也が訊く。みゆきは慌てて、

「なにも……」

と首を振って立ち上がりかけた。

「痛っ！」

その顔が苦痛でゆがみ、もう一度しゃがみ込んでしまう。俯く少

女の顔の前に、手が差し出された。

「みゆき。掴まれよ」

え？と少女は顔をあげた。そこに心配そうな慎也の顔があった。

「あ、あ、あの……」

「それじゃ、帰れないだろ。俺のチャリの後ろに乗れよ。送って行くから」

「慎也……」

みゆきが怖ず怖ずと指しだした手を慎也は優しく取った。そして引つ張り上げる。それは男の子の力強い腕だった。

「ちゃんと掴まってるよ」

「う、うん」

みゆきの腕が慎也の腰に回っていた。

荷台に横座りした少女は、ショートの髪を軽くかき上げる。ほんのり上気した頬を手で隠すように。

「なあ、みゆき」

揺れる自転車が風を追い越しながら走る。住宅街の街路樹が、青々と輝いている。

みゆきは足の痛みも忘れ、心地よさに、その光景に見とれていた。慎也の声で我に返る。

「なに？」

「前にもこんな事あったっけ？」

少女が少し緊張する。

「いつ？」

「さあ、いつだろう？」

慎也は考えながら、

「中学生……？いや、違うか？小学生の時……？あれ？違うか」  
彼の思案が続く。

「そんなことあったっけ？」

みゆきが言うと、慎也は自信なげな口調になり、

「あつたと思うんだけどなあ。わかんねえや」

そう言って口をつぐんだ。みゆきが小さく息を吐いた。

「じゃあな」

少女の自宅の前で慎也は声をかける。玄関に立ったみゆきに言った。

「あした、迎えにきてやるよ」

「え？」

みゆきがびつくりした表情をする。

「なんだよ。うれしくないのか？」

慎也は、ちよつと視線をはずすと照れながら、そう言った。

「いいの？」

みゆきが訊く。

「ああ」

慎也がぶつきらばうに答える。

「あ、ありがとう！待ってる」

みゆきのうれしそうな、元気な声が聞こえた。

「さて、帰るか」

慎也はそう呟くと自転車に跨った。

しかし、ふと、思い出して、

「そっぴゃ、今頃かな？」

と声に出した。

みゆきの家の庭に、今頃ラベンダーが咲いてるはずだ。

放課後、理科準備室でかいだ香りを思い出した。

ちよつと覗いていこうか？懐かしくなつて、そんなことを考えた。

慎也は、道を回って庭が見える方に出ようとした。

そこは小道から少し大きな通りに出るあたり。

庭を覗き込みながら、何気なく飛び出した慎也の目の前に、大型のトラックがスピードを落とさずに突っ込んできた。

え？

その光景が、慎也にはまるでスローモーションのように見えた。そのくせ、頭の中は真っ白で、素早くよけることもできない。トラックが目の前に迫った。脳裏に、ぶつかる！という確信が広がる。

同時に、恐怖がわき上がる。

刹那、慎也は、ラベンダーの香りを嗅いだ気がした。

「あ、ありがとう！待ってる」

みゆきが少し頬を染めて嬉しそうにそういった。

あ、あれ？

そこは、彼女の家の玄関。慎也は、みゆきに手を振っていた。

あれ？これって、さっきの……

え？え？なんだ？なにが起こったんだ？

慎也が呆気にとられている間に、「じゃあね」といつてみゆきは家の中に消えた。

俺、どうしたんだろう？

混乱した頭で、慎也は考えた。

さっきのは夢か？それともこれがデジャブーなのか？

そう思いながら、無意識に確かめようとして、同じようにみゆきの家を回り込んだ。

小道から出る場所に来て、ビクツと足が止まる。

恐る恐る先を覗き込もうとしたとき、風を伴ってトラックが横切った。

ドクンと大きく心臓が鳴って、背筋を冷たい汗が流れ落ちた。

ほ、ほんとだったあ。と慎也は思った。

じゃあ、これって、予知したのか？

いま来た道を振り返ったとき、みゆきの家の庭から、ラベンダーの香りがした。

ふっと、視界が白く染まる。

気がついたとき、目の前にみゆきがいた。

「あ、ありがとう！待ってる」

さっき聞いたはずの言葉。見たはずの表情。これは！と慎也は思った。

このあと、みゆきは手を振って家に入っていて……ほら、その通りだ！

目の前で、みゆきが玄関に消える。慎也は、信じられない表情で、それを見送った。

信じられないけれど、信じずにいらなかった。

これって、さっきの場面だ。そう、3回目だ。つまり、俺は、3回同じ時間を繰り返したって事か？

それって……時間を戻った？時間移動？タイムトラベル？

信じられねえ。でも、確かだよな。

慎也はハッとして、小道の先を見つめた。その出口の先を、大型のトラックが横切った。

サーと鳥肌が立った。

や、やつぱりだ。さっき見たとおりだ。慎也はそう思った。

でも、なぜだ？

疑問が浮かぶ。

なんでこんな事が？

そう考えたら、一つ気づいたことがあった。

ラベンダーだ。ラベンダーの香り。さっきから、ラベンダーの香りがしたと思ったら、時間を戻っていた。

理由はわからない。けれど、原因は、もしかしたらあれなんじゃないか？と慎也は思った。

そう思うといてもたつてもいられなくなり、慎也は、みゆきの家の玄関を入ると、今度は直接、庭の方に回った。

建物の影を越えて、恐る恐る庭に近づいた。

角を回って庭に出た。

そこに綺麗な紫色のラベンダーが咲いていた。

ああ、と慎也は思いだした。

この庭で、幼い頃みゆきと遊んだな。夏には、庭にビニールプールを出して、水遊びしたっけ。あれは、いつだったかな？

そんな追憶にとらわれていたとき、庭に面した部屋の窓が開いて、不審気な声がかかった。

「慎也？ 慎也なの？」

振り返るとみゆきが驚いた表情でこちらを見ている。

「そこでなにしてるの？」

「あ、俺……」

言いかけた慎也の鼻に、風に乗ってラベンダーの甘い香りがとどいた。

あっと思ったときには、慎也の視界はホワイトアウトしていた。やっぱりという想いと、まただ、という想いが同時に浮かんでいた。

気がついたとき、さっきまでの場面とは全然違っていた。

慎也は、むっとする熱気に思わず空を見上げた。

青空にモクモクとした白い大きな入道雲がかかっていた。まるで

夏の空。いや、実際夏のような暑さだった。

「うへー、暑い」

慎也はたまらず制服の上着を脱いだ。それからシャツの腕をまくる。それでも、汗が噴き出してきた。

「どうなってるんだ？」

そう一人呟いて、慎也は辺りを見回す。

自分の立っている通りは、みゆきの家の近くに違いない。でも、見覚えがあるような、ないような不思議な感じがした。

また、時間を飛んだのか？

やっぱり、ラベンダーが関係してるんだ。

慎也はそう思って、さっき見た驚いているみゆきの表情を思い出した。

まじいな。俺がいなくなつて、あいつ驚いてるんだろうな。

そこで、慎也はひらめいた。

そうか、あの前に戻れば、いいのか。それで庭に行かなきゃいいんだ。

うん。そうだよ。よし、戻ろう。

そう思って、ラベンダーの香りを嗅ぐために、慎也はみゆきの家の庭に戻った。

そこで、慎也は目を疑った。

建物の影から覗いた彼女の家の庭には、丸いビニールプールが置かれ、そのなかに幼い女の子がビーチボールを抱えて座っていた。ピンクの花柄のワンピースの水着を着ている。

みゆき？

慎也はその女の子に見覚えがあった。

それはまぎれもなく、幼い頃のみゆきの姿。まだ、小学校に入りたてぐらいじゃないだろうか？

ということは、俺は、そんなに時間を戻ったのか？

慎也は呆氣にとられた。先ほどまでとは、規模の違う時間飛行である。

なんで、こんな事に？

チラッと、さっき庭先でこの光景を思い出したなという想いが蘇る。

ひょっとして、この事を思い出していたから？だから、その時に飛んだのか？

慎也の胸に確信めいたものが湧いた。だとしたら……。

その時、庭に面した部屋から、子供が走り下りてくるのが見えた。水着を着た幼い男の子。

お、俺だ！

慎也にははつきりとわかった。幼いふたりが小さなプールで水を掛け合っている。きゃあ、きゃあ、言う、歓声が聞こえてきた。

それをしばらく懐かしそうに眺めながら、慎也は、ハッとして我に返る。

そうだ、ラベンダー！

庭にはラベンダーの花は咲いていない。それもそのはず、季節は夏なのだ。

それに気づいて、慎也は蒼くなった。

どうしよう？ラベンダーがない！帰れない！

慎也はふらふらと、その場を離れた。

夏の暑さに朦朧となりながら、慎也は当てもなく歩いていた。いまは夏。ラベンダーは咲いていない。これじゃ、元の時間に帰れない。どうしたら、。。。



いつの間にか駅前の繁華街を歩いていた。何となく違和感があるのは、一昔前の街の飾り付けだからだろうか？

しかし、慎也は、それには気を止めることもなく、暑さを避けるために、ようやくたどりついた駅前のデパートに入った。

館内の冷房が体を包み、慎也はようやくほっと一息ついた。そのままホールのベンチに腰掛ける。

ぼんやり座りながら、頭では、どうしたら帰れるんだろうと必死に考えていた。

最悪、春まで待たないといけないのか？その間、どうやって過ごせばいいんだろう？まさか、自分の家に帰るわけにもいかないし。

慎也の脳裏に、公園にビニールシートと段ボールでつくった家に暮らす、自分の姿がよぎった。

「げえ。まじかよ」

弱々しいつぶやきが漏れた。

あゝあ、と顔をあげて、デパートの中を見渡した。そこで、ふと、目が止まる。

綺麗な女性が微笑むポスター。たぶん化粧品の広告だろう。

そのポスターの横に、春の香りと書かれたポスターが並べて掲げられていた。その写真が、、紫に咲くラベンダーだった！

がたと音を立てて、慎也は立ち上がった。急いで、そのポスターの元に走った。

それは、香水の広告。春のいろいろな花の香りの新商品だった。

これだ！慎也はそう思った。震える声で、店員のお姉さんと呼んだ。

「す、すみません。この、ラベンダーの香りの香水を、ください」  
お姉さんはちよつと微笑んで、

「贈り物ですか？」

と聞いた。

「いや、あの、ちが……」  
「いますと言いかけて、まずいと思いとどまった。男の俺が香水って……」

「え、ええ。そうなんです」

慎也は、冷や汗を流しながら、そう答えた。チラツとみゆきの顔が浮かぶ。

あとで、彼女にあげることにしよう。そうすれば嘘じゃないな。なぜか律儀にそう思っていた。

香水を受け取って、トイレに入った。

「なにやってんだろうね、俺は」

慎也は、教師に見つかからない様にトイレで悪さをする中学生になったような気分になった。

まあ、いいか。そういつて、香水のふたを取った。

脳裏に、何回も見た玄関先のみゆきを思い浮かべる。そうして、香水を振った。

たちまち濃厚なラベンダーの香りが鼻をついた。視覚が白く染まる。

そして、気がついたとき、慎也の耳にみゆきの声が聞こえた。

「あ、ありがとう！待ってる」

家に帰って、パソコンをネットにつなぐ。

慎也はさっそく調べてみた。

今時、ネットで大抵のことはわかる。それが真実かどうかは別にして。

慎也の身に起こったことは、俗に、タイムトラベル、もしくは、タイムリープ（時間跳躍）と呼ばれる現象であることはすぐわかった。

しかし、それはSFや物語の世界の出来事で、現実には、物理法則を無視していると言うことだった。

しかし慎也自身には、実際に体験したことだ。物理法則がどうだろうと、出来ちゃったものは、仕方ないという気になってくる。

えらい物理学者だって、間違えることもあるさ。そんな気分だ。

なぜ、ラベンダーの香りで起こるのかについては、なにも情報はなかった。

あまたの物語にも、そんなきつかけはないのかもしれない。事實は小説よりも稀なりというやつだ。

もう一つ、どういう時間にいけるのか？または、どうしたら望む時代にいけるのか？については、諸説紛々としていた。

ある場合は、過去も未来も、何らかの装置をセットすることで移動できる。ある説では、それは全くの偶然に支配される。他にも、望むところにいけるといいうものもあった。

慎也には、さっきの出来事から、一つの仮説があった。

最初にはつきりしなかったけど、俺は脳裏に思い浮かべた時間に移動したんじゃないか？

最初、みゆきと別れた場面に時間移動したのは、庭を眺めながら、彼女のちよつと照れた表情を思い浮かべていたからだ。

子供の頃に飛んだのは、庭でプール遊びしたのを思い出していたからで、戻って来れたときは、はつきりとあの場面を思い浮かべた。だから、俺の場合、思い浮かべたところにいけんじゃないのか？そう思うと、慎也は、なんだか、すごいことだという気持ちが沸々と湧いてきた。

俺って、すごい能力を身につけたんじゃないか？これなら、失敗なんてありえねえ。

そう思いながらも、彼は、本能的な怖れも感じていた。

これは普通じゃない。下手に使うと、大変なことが起こるんじゃないか？という心の声だ。

慎也は少し息苦しくなって、窓を大きく開け放った。途端に心地よい夜の風が吹き込んでくる。

あれ？もう夜か？

いつの間にかすっかり暗くなっていた。

彼は急にお腹が減っていることを感じて、何か探しに行こうと立ち上がった。

頭の中には、まあ、何か困ったことが在れば、この力を使ってもいいかという想いがチラツとよぎって、消えていった。

「ちゃんと医者行ったのか？」

「ううん。行ってない」

慎也の問いに、みゆきは自転車の荷台で揺れながら答えた。

朝の登校。約束通り、慎也はみゆきを迎えに行った。彼女は少し照れながら、玄関から出てきた。

でも、玄関のチャイムを鳴らすのに慎也がどれほど恥ずかしかったか、彼女は知らないだろう。

それでも、足を引きずっている彼女の姿を見て、慎也は自分のとった行為をよかったと思った。

背中の少女に声をかける。

「大丈夫なのか？ 帰りに医者、連れてってやろうか？」

その言葉にみゆきは少し笑いながら、

「どうしたの、慎也？ 昨日からなんだか、優しいね」

「ばっ、なっ、そんなんじゃないね。おまえが歩きにくそうだから…」

…

「ふーん。たまには、怪我するのもいいかな」

少女はそういつて楽しそうに笑った。

慎也は少しドギマギしていたが、そこで、少女に聞いてみたくなつた。

「なあ、みゆき」

「ん？」

「その怪我、痛くていやだったら、俺が無くしてやろうか？」

「え？ どうやって治すの？」

慎也は、自分が昨日に戻って、みゆきの怪我を防げばいいと思った。だから、治すではなくて、無くすだ。

「いや、どうやって言うのは、説明が難しいというか、なんというか……」

慎也が口ごもっていると少女は明るい声で言った。

「いいよ。いらない。だって、すぐ治ったら、慎也に迎えに来てもらえないもん」

「そう…か」

「うん」

慎也は、少しガツカリしてその言葉を聞いた。

自分の得た力を、少し使ってみたかったし、それで、みゆきの役に立てると思ったからだ。

だから、みゆきの言った言葉に込められた意味を、あまり気に留めなかった。そのかわり質問が口についてでた。

「おまえさ、自由に時間を超えられたら、なにしたい？」

「え？なにそれ？どらちゃん？」

みゆきは怪訝な声で聞いた。

「いや、例えば昔に戻れるとしたら、なにがしたいかなあと考えてさ」

慎也がそういうと、少女はしばらく無言でいたが、静かに答えた。

「慎也と一緒に過ごしたい……」

そのいい方があまりに真剣だったので、慎也は一瞬呆気にとられた。それから、心臓が騒がしく鳴る音を聞いた。

「ば、バカ、なんだよ、それ。小学校も、中学校も一緒に行っただろうが、俺達……」

一瞬の沈黙のあと、みゆきが慌てたように言った。

「そ、そうだよ。もう一度してもね。かわり映えないよね」

「なんだよ。それ。自分でいっというて」

「あははは。捻挫のせいかなあ」

「絶対、違っだろうが！」

慎也は、まだ治まらない胸の鼓動を隠すように、思いつきりペダルを踏み込んだ。

昼休みに購買で買ったパンを食べ終えて慎也が教室に戻ってくる

と、クラスの女子が何人が集まって、はしゃいでいた。

その中にみゆきがいるのを、慎也は目の端に認めた。うわあ。とか、かわいいー、とか言う声が聞こえてくる。

慎也は脇を通って自分の机に向かいながら、チラッと女の子たちが見ているものを確認した。

それは、よくあるファッション雑誌だったが、いま彼女たちが見て話題にしているのは、流行の服ではなく、むしろ少し前のはやり物だった。

見開きページのタイトルは、『懐かしのグッズ！あなたのお気に入りだったのは？』だった。

そのうちみゆきが話すのが聞こえてくる。

「これいいなあ。へえ、こんなの在ったんだね」

「あれ？みゆき知らないの？たれアライグマ？」

「う、うん。覚えて無いなあ」

「そうなんだ。中一ぐらいの時に、あんなにはやったのに」

「そうなんだ……」

その会話を自分の席で聞きながら、慎也は、そのグッズ、ぬいぐるみの『たれアライグマ』を思い出していた。

そうそう、そんなの在ったな。やたらぐたつとした感じにデフォルトメされたアライグマ。

そっぴい、人気だったっけ。もう、5年ぐらい前だったっけ？と思った。

その時、みゆきが言うのが聞こえた。

「ああ、いいなあ、これ。わたしも欲しかったなあ」

慎也の脳裏に、ピンと何かが立った。

そうだ、これだ。

慎也は一人呟いた。

授業が終わって、慎也がみゆきのところにやってくる。  
「送っていくぜ」

「あつ」

少女は少し照れた表情をして、それから、「ありがとう」と答えた。

「医者行かなくていいのか？」

慎也が背中 of 少女に声をかける。

「うん。もうだいぶ腫れが引いてきたから、行かなくても大丈夫」  
「そうか」

「でも、あの……」

少女のためらいがちな声。

「ん？なんだ？」

慎也は訊いた。

「あしたも……送ってくれる？」

「あ、ああ。いいぜ」

「ほんと?!」

「ああ」

みゆきはうれしそうに、「約束ね」と言った。

「あ、そういえば」

今度は慎也が話しかける。

「おまえ、たれアライグマ、欲しいのか？」

「え？」

「昼休みにそんな話、してなかったか？」

少女は少し驚いたように、

「聞いてたの？」

「ああ、ちよつとな。それで、もし欲しいんだったら、おれんちに  
寄れよ」

「え？どういうこと？」

みゆきは怪訝そうに聞いた。

「あゝ、おれんちに、あんだよ。それ」

「ほんと？」



「ああ」

「なんで？」

「なんでって……」

慎也はちよつと言葉に詰まって、

「昔、買ったやつがあるんだよ」

「へえ、誰が買ったの？ 慎也？」

「悪いかな？」

「う、ううん。そうじゃないけど……」

「何だよ」

「似合わない」

少女はくすくすと笑い出した。

「おまえ、やらねえぞ」

「え？ くれるの？」

少女が驚いていう。

「ああ」

「うれしい！」

慎也の答えに、みゆきは素直に喜んだ。

「そこで待つてろ」

慎也の家のリビングルームで、みゆきはソファに座った。

この場所に来るなんて、何年ぶりだろう？

「うん。待つてろ」

そう言つてソファに腰掛けたみゆきを残して、慎也は自分の部屋に向かった。

その部屋に、たれアライグマは……もちろん無かった。

「よし、やるぞ！」

慎也は一声自分に気合いを掛けると、脳裏にたれアライグマ熱狂時代（？）を想い浮かべ、引き出しから取り出したラベンダーの香水を自分に振りかけた。

途端に視界が白く埋め尽くされる。

気がついた時には、デパートのおもちゃ売り場にいた。

そこに、大きささまざまな大きさのぬいぐるみがあるところ狭しと置かれている。大半が、たれアライグマ。

へえ、こんなに人気だったんだ。

と慎也は感心した後、あ、タイムリープ成功した、と今更ながらに思った。のもつかの間。

その場にいるたくさんの女子高生の、なーにい、この人、という冷たい視線を浴びた。

「うっ」

思わず逃げ出しそうになって、危うく踏みとどまった。

慎也は心の動揺を隠し、平静を装って、ぬいぐるみをひとつ手に取ると、一目散にレジに駆けつけた。

お金を払って、トイレに駆け込む。

何で、やっぱトイレなんだか、と慎也は自分でもあきれた。

それでも、目的地（時間？）を想い浮かべ、ラベンダーの香水のにおいを嗅いだ。

「みゆき、悪い、待たせた」

そういつて慎也がリビングに入って来たのは、出て行ってからまばたき三つ程の時間だった。

「うわ。はや！」

みゆきは驚いた声を出した。

「もう、取ってきたの……で、それ?!」

少女は慎也の腕の中を見つめて声を上げた。

そこに……ほとんど等身大のたれアライグマのぬいぐるみがあった。

「大きい、ていうか、大きすぎ?どうやって、貰って帰ればいいのか?」

「え?あ?そうかあ?」

慎也は今初めて気がついたというように言って、頭をかいた。そ

して、

「あ、大きすぎるんだったら、代えてもらってもいいけど……」

「はあ？代えてもらって、誰に？」

慎也は、みゆきに言葉に、自分の失言に気づいた。

「い、いや、嘘だ。えっと、俺が持つて行ってやるよ」

「ほんとに？」

「ああ」

「でも、いいの？こんなの貰っちゃって？」

「ああ、いいんだ」

「でも、慎也の抱き枕じゃないの、これ？」

慎也は目を丸くした。

「はあ？違うよ。なにが悲しくて、たれアライグマを抱かなきゃ何ねえんだ？」

「あははは」

少女が楽しそうに笑った。

ちよつと怒った顔をしていた慎也も、つられて笑い出した。

ぬいぐるみの事があってから、慎也はタイムリープをすることをそれほど恐れなくなった。

彼は何度かの経験から、自分のタイムリープの特徴を掴んだ。

まず、基本的に頭に想い浮かべた時へ移動できるようだった。

しかし、未来へはいけなかった。でも、それは当然かもしれない。未来は誰も見たことが無いのだから。

慎也に、確実な未来を思い浮かべることはできない以上、未来にはいけなかった。

しかし、過去ならば、それが慎也の見たことのある時間でなくとも行くことができた。

例えば、何かの写真に映っている時代。また、絵画でもよかった。そういったものが映っている時代にいくことができた。

また、さらに、モノを思い浮かべれば、そのあった時代にいくこともできた。

極端な話、銅鐸を見れば古墳時代に、十二単を見れば平安時代に行くことも可能だった。

おお、すごいなあ。慎也は素直にそう思った。

多少歴史に興味を持つ慎也は、これなら歴史の謎を自分が解くこともできるじゃないかと思った。

例えば、アメリカのケネディ大統領暗殺事件の真相とか、源義経はほんとにモンゴルに渡ったのかとか？徳川埋蔵金の在処とか？

だんだんテレビのワイドショーネタになってくるような気がするが、そういうことが現地で見られるかもしれないのだ。しかし……

「ま、いつか」

慎也は、ひとまず、その興味を脇に置いておいた。それよりも、身近にいる興味があったからだ。

例えば、間近に迫った定期考査。

未来に飛ぶことは出来ないが、受けた後に過去に戻ることは出来る。

ということは、テスト問題もすでに知っていると言うことだから、楽勝じゃん！

と考えてから、いや、だめだ、だめだ。おんなじ問題を二度も解くなんて、やってられるかよ。と慎也は思った。

それなら、一発勝負の方がいい。男は黙って、一発勝負だ。などと考えた。

また、クラブの試合（慎也は剣道部なのだが）で、相手の戦法を確かめてから、もう一度闘うという手もある。

試合は好きだから、何度でも闘うのはいいが、しかしこれも、やっぱり自分の実力で勝った気がしないような気がして、結局却下した。

そんなこんなで、慎也の出した答えとしては、みゆきにしように自分以外のために使うか、知らなかった時代の散策をするーそれこそ、ちょっとした旅行者気分でーに使うという結論になった。

「さて、どうすっかなあ？」

慎也は昔のことを思い出すきっかけになるかな？と思って、中学校の卒業アルバムを眺めていた。

写っているクラスメートの顔に、中学時代のバカな思い出が蘇る。できればそれを無かったことにしに行きたいような気がするが、なんとか思いとどまった。

「あれ？そういえば……」

慎也はそこで違和感を覚えた。

クラスの集合写真。そこに、見覚えのある顔が一人見つからなかった。

みゆきの姿が映っていない。

確か、同じクラスだったよな？

慎也は記憶を手繰ってみる。そこに、中学のセーラー服姿のみゆきが浮かぶ。

変だなと思って、他のクラスの集合写真も見てみるが、そこにもみゆきは見あたらない。

あれ？みゆき、どうして写ってねえんだ？

もしかして、風邪で休みだったのか？ドジだな、あいつ。普段は、冷静なくせして、時々ひどく間抜けだから……。

そう思う慎也の脳裏に、初めてみゆきと出会ったときの泣き顔の彼女の表情が浮かぶ。それは、鮮やかな記憶だった。

「じゃあねえなあ」

クラス写真にも写れないなんて、この時のみゆきも落ち込んでたんじゃないか？

と思つて、慎也はあることを決心した。

よし、俺が連れてきてやろう。

季節はもうすぐ冬。

街路樹が綺麗に紅葉して、季節の変わり目を美しく飾っている。

「しまったなあ。服変えてくればよかった」

慎也は半袖姿の自分の腕をさすって、少し暖をとる。

みゆきが病気ならば、さらに遡って注意してやろうと思い、その道のみゆきの家へと急いだ。

みゆきの家のチャイムを押した。

「はい。どなた？」

そういつて、みゆきのお母さんが玄関を開ける。慎也はちょっと緊張した。

「あら、慎くん。どうしたの？透とおるならまだ帰ってないわよ」

透は、みゆきの弟で、2年下だ。

「いえ。おばさん。透に用じゃなくて、あの、みゆき、具合どうですか？」

「え？」

慎也がそういうと、おばさんは、困った顔をした。

「えっと、誰のことをいつてるの？」

そう聞いてきた。

「誰って、みゆきです……」

「みゆき？ 慎ちゃん、それ、どこのお嬢さんのこと？ うちには、娘はいないけど……」

え？

慎也は、その言葉に固まった。

娘がいない？ そんな…… どういう……？

おばさんが笑いながらいった。

「慎ちゃん、いい人出来たのかしら？ そんな勘違いしちゃうなんて、恋煩い？」

「あ、す、すみません」

慎也はそういうと、急いで、その場を離れた。

一体、どういうことなんだ？ みゆきがない？

俺、どこに来たんだろう？ もしかしたら、ずっと昔に来ちゃったのか？

……いや、ありえねえ。おばさんは、俺の知ってるおばさんだっただぞ。

もしかして、別の世界とかあるのか？ みゆきのいない世界。パレルワールド。

いつの間にか、そんな異空間に移動しちまったのかも。 そうなのか？

うーん。 どうしよう？ ここは、とりあえず…… 戻るか。

慎也はそう考えると、自分の時間に戻るために、タイムリープした。

翌日、教室で慎也はみゆきに尋ねた。

「おまえさあ。中学の卒業写真に写ってないだろ」

「え？」

みゆきは少しびっくりした表情。

「病気だったんだっけ？」

慎也の質問に少し焦ったように少女は答えた。

「え？えっと、どうだったかなあ？ちゃんと覚えてないけど……そうだったかもね」

「ドジなやつだなあ」

「そ、そうだね」

あれ？

みゆきの慌てぶりを見て、慎也の心に、少し違和感がわき上がった。

昨日の記憶が蘇る。言葉が口をついて出た。

「みゆき、おまえさ、中学、いたよな？」

「え？」

少女の驚いた顔。それから、

「いたに、決まってるじゃん」

叫ぶようにいった。

慎也の疑念がさらに深まった。少女が言葉を重ねる。

「慎也だって、知ってるでしょ。一緒に中学行ってたじゃない」

そういわれると、慎也もそんな気がした。

中学のセーラー服のみゆきの姿。それは、浮かぶ。ただ、彼女と過ごした記憶が曖昧だった。具体的な記憶が思い出せない。

あれ？こいつクラスのどこに座ってたっけ？クラブは？遠足は？修学旅行は？

そう思って、慎也が首をひねっていると、みゆきの見つめる瞳に気づいた。

「慎也。どうしたの？」

その声が、少し震えているように聞こえた。慎也は、考えがまとまらないまま、



「なんでもない」  
と一言告げて、席に戻った。

家に帰った慎也は、もう一度冷静になって考えてみた。  
みゆきとは幼なじみだ。

以前タイムリープしたとき、彼女の庭のプールでふたりで遊ぶ姿を目撃している。

だから、あれは間違いなくあったことだろう。  
じゃあ、いつ彼女に出会ったのか？

その記憶は、慎也の中で、鮮やかだった。忘れもしない幼い頃。  
そうあれは……

慎也はまず、それを確かめようと思った。

見慣れた住宅街。けれど、どこかしら懐かしさを感じる通りに慎也は立っていた。

その時にタイムリープしてきたのだ。

つきあたりの道の右側から、小さな男の子が、幼稚園の制服姿で歩いてきた。

「俺だ！」

慎也は一人呟いた。

男の子は道をあっちに行ったり、こっちに来たりしながら、なにかおもしろいのか、遊びながら歩いていく。

慎也はその姿に、我ながら苦笑してしまった。

子供の姿を追いかけて、通りを曲がった。

その道の先、幼い自分のさらに向こうに、一人の女の子の姿が見えた。

その姿は、まるで天使のように見えた。

ふわっとしたワンピースから、細い腕が覗いている。短めの髪にピン留めのリボン。小さな赤いイヤリングが耳を飾っていた。

しかし、その顔は涙に濡れてくしゃくしゃになっている。

少女は、立ちつくして、泣いているのだった。

その姿をようやく目に止めた幼い慎也は、口をぽかんと開けて、少女を見つめていた。

ああ、そうだったな。といまの慎也は思い出していた。

あの時俺は、どこかのお姫様がいるのかと思ったんだ。童話で読んだお姫様。

それが、どうして泣いているのか不思議だったんだ。だから……。幼い慎也が、少女に声をかける。

「どうした？なんで、泣いてる？」

少女が話しかけられたことにびっくりして、顔をあげた。そうして、目の前の男の子を見つめた。

「帰れ……ないの」

「え？」

「どこだか、わからないの……」

そういつて、少女は嗚咽をあげる。

「どこから来たんだ？外国か？おとぎの国か？」

少年が訊いた。少女は首を振ると、

「わかんない。わかんない」

と繰り返した。

すると少年は、なにを思ったか、少女の手を取った。ビクッと少女の肩が揺れる。

「一緒に……」

少年は言った。

「え？」

「一緒に探してあげる。君のおうち」

少女は一瞬驚いた表情をして、それから、

「ほんと？ほんとに、探してくれる？」

「ああ。まかせとけ」

その言葉を聞いて、少女がほっとしたように、笑った。

慎也の心臓がドクンと鳴る。いまの慎也も、子供の慎也も同様だ

った。

その少女の泣きあとの笑顔。慎也の脳裏に鮮明に刻みつけられていた。

「俺、慎也。君は？」

少年が尋ねる。少女は恥ずかしそうに言った。

「みゆき」

ふたりは、そのまま手をつないで、歩いていく。

幼い慎也に何か当てがあったわけではない。お巡りさんの所にいけば？と言ったことも、気がつかなかった。

ふたりは当てもなく歩き、やがて、疲れて道ばたに腰掛ける。少女が、再び泣きべそをかきだした。

「大丈夫。絶対見つけてやるから。泣くなよ」

幼い慎也は、気持ちだけは、お姫様を守る王子になっていた。並んで座りながら、少女の手を握りしめていた。そして、

「大丈夫だから」と繰り返した。

ふつと、視界に黒い影が被さった。

慎也は、顔をあげてその影を見る。目の前に、自分の母親ぐらいの若い女の人が立っていた。

「あ、透のおばさん」

それは、慎也の近所の友達のお母さんだった。

「どうしたの、慎也くん？」

「えっと」

「その子は、どこの子？」

おばさんの声に、少女が顔をあげた。

その時、少女のイヤリングが、キラリと光を放した。

一瞬の出来事。

しかし、次の瞬間、おばさんは、少女を抱き寄せていた。  
「みゆき！どこ行ってたの。心配したわよ」

え？

なんだ？どうした？

物陰に隠れて見ていた、いまの慎也が、驚きの声を上げる。

だって、さっきまでおばさんは、みゆきのこと知らないふうだったぞ。それが、一体、どういうことだ？

混乱する慎也を残して、幼い慎也とみゆきは、手を振って別れていく。

みゆきのもう一方の手は、おばさんにしっかりと握られていた。

慎也は混乱する頭で、考えていた。

これって、みゆきは迷子だったって言うことだよな？透のおばさんの子供……じゃない？もしかして、違う？

でも、急におばさんは、みゆきをわかったようだった。それって、どうなってるんだ？

慎也の頭の中を、はてなマークが乱れ飛ぶ。

あゝ、わかんねえ。慎也は頭を抱えた。

ただ、どういう経緯やからくりがあるにせよ、みゆきが幼なじみであることは、確かなようだった。

それなら、中学のアルバムに載ってないのは？あの時、彼女が忘れられてたのは、どうしてだ？

もしかして、いつかなくなっただのか？現れたときと同じように？突然、慎也の脳裏を何かがフラッシュバックした。

叫ぶみゆきの幼い姿。自分が声を上げて追いかける記憶。足元に投げ出した、自転車倒れて……。

くっ！

慎也の頭が痛みに歪む。

くそっ！なんだ、これは？いつの記憶だ？

断片的な記憶は、意味をなさなかったが、なぜか、胸が騒いだ。

慎也は、訳も分からず、だけど、何か大切なものを感じた。胸が苦しくなってくる。

たぶん、これだ。これが鍵なんだ。  
慎也は、そう思った。そして、それを確かめるべく、ラベンダーの香水を開いた。

夕暮れ時の鮮やかな夕焼けで、空が染まっていた。

公園から、子供たちの元気な声が聞こえている。

「さよならー」

「またね」

「また、あした」

公園の入り口から、自転車に二人乗りして、子供がでてきた。

小学校3、4年ぐらいだろうか？少年がハンドルを握り、少女が荷台に腰掛けている。

少女は膝小僧をすりむいているようだった。

幼い慎也が背中にも声をかける。

「みゆき、痛いかな？」

「ううん。だいじょうぶだよ」

「おまえさあ、もうちょっと女の子らしくした方が、いいんじゃないかな？」

「なによ、それ」

「いや、なんていうか、生傷が絶えないっていうかさ……」

「だって、そんなの……」

「あん？」

「慎也が、危ないことばかりして遊ぶから……」

少女の頬に、怒りとも、照れともわからない赤みがさした。

「いや、だから、無理して俺に会わさなくても……」

「なによ、わたしが、邪魔？」

「いや、そういうわけじゃ……」

幼い慎也は困ったような声を出した。

その姿をいまの慎也は、少し離れたところから、歩きながら見て

いた。

自分の言い分に、ちよつと複雑な感情が湧く。

このころ、俺って、素直なのか？素直じゃないのか？あははは。

そう思いながら自転車についていつていたとき、突然、複数の人影が、前方の自転車を取り囲んだ。

幼い慎也が、ブレーキをかけて止まる。

「なんだ？」

彼は、訝しげに、前に立ちはだかった男たちを見た。

なにやら時代がかったスーツ姿に、夕暮れ時だというのに、サングラスの大人が3人。

彼らは立ちはだかったと思った次の瞬間には、一人が自転車の後方に回る。そして、少女を抱え上げた。

「きゃあー」

みゆきが足をばたつかせながら、叫んだ。

「なっ！」

幼い慎也は、自転車を投げ出し、みゆきを抱える男にくっつかかろうとする。

しかし、その体が、もう一人の男に押さえつけられた。

「くっそ〜。離せ！この野郎！」

慎也が悪態をつく。

「慎也！」

みゆきが手を伸ばして、慎也を呼んだ。

「みゆき、待ってろ！」

慎也は男を振りほどこうと体を激しく揺すった。

しかし、その時、男の手の平が幼い慎也の口を被った。途端に慎也がぐったりする。

見ると、みゆきも同じように意識を失っているように見えた。

それが、ほとんど一瞬の出来事だった。

後ろで見ていたいまの慎也が、ハッとして我に返った。

「な、なにしゃがる！」

慎也は、そう叫んで、駆け出そうとした。

ところがいつの間にか、3人目の男が、慎也の傍に来ていた。

あっと思ったが、とっさに体を離して、男を避けた。

かわした、と思ったとき、後頭部に衝撃が来た。うっと、意識が薄くなりかける。

手に持っていた、ラベンダーの香水が滑り落ちる。

地面にぶつかった香水が、飛び散った。

どうして？という想いが消える意識の中で浮かび上がる。

その時、慎也にラベンダーの香りが届いた。



## ― 最終話 ―

白い世界。

これは夢の中なのか？ぼんやりした意識で、慎也は思った。

白い霧が所々晴れると、いつか見たような、合戦の場面が現れる。甲冑に身を固めた武者が馬で駆け抜けていく。

自分は、どこでそれを見ているのだろうか？

再び、視界が白く閉ざされ、やがてまた晴れていく。

今度は、見たこともない世界が広がっている。

巨大な熱帯の植物が生い茂り、どこからか、どどどど、という地鳴りが聞こえる。

巨木が倒され、現れたのは、はるかに見上げる様な巨大な生き物。恐竜だった。

あまりのことに、慎也はようやく意識がはつきりしてきた。自分のいる場所もわかってきた。

一体何で、こんなところに？どれだけ、時間を跳び越えたんだ？戻らなきゃ。あの、みゆきが連れていかれそうになった時間へ戻らなきゃ。

そう思っ、ポケットを探って、慎也は、ハッとした。

ない！香水が、ない！

そうだ、あの時！落とした！

慎也の胸が焦燥で満ちる。

これじゃあ、帰れないのか？俺は、この時代から、帰れないのか？みゆきを助けることも、もう、二度と会うこともできないのか？慎也の頭は真っ白になった。

周りを見る余裕もなかった。だから、巨大な生き物が、大きな足音を立てて近づいていることも、気がつかなかった。

背丈ほどもある下草の間から、その恐竜は飛び出してきた。

本来おとなしい草食竜だったが、おわれていたのだろう、怒濤の

勢いだった。

慎也が気がついたときには、すでに目の前まで迫っていた。

「うわあ」

巨大な足がぶつかる。まるで、いつかのダンプカーのようだった。俺は死ぬのか？

チラツと脳裏をよぎったとき、仄かなラベンダーの香りがして、慎也は白い霧に被われていた。

え？と思った。

視覚がホワイトアウトしたからではない。自分のお腹に、白い腕が後ろから回されていたからだ。

「なにやってるの、慎也？」

耳元で、聞き慣れた声が聞こえた。

驚いて首だけで振り返る。そこに、みゆきが、背中から自分を抱きしめているのを見た。

「な！？なんで、みゆきが？」

「だめだよ。こんな不完全なタイムリープしちゃあ」

みゆきは慎也の質問には答えず、そんなふう to 怒った。でも、口調は、全然怒ってはいない。

「みゆき、おまえ、どうして、タイムリープのことを……ていうかいま、おまえも、してきたのか？」

慎也は驚きながら訊く。

「うん。そうだよ」

「なんで？」

「慎也を連れ戻しに来たんだよ」

「いや、そうじゃなくて、なんで、おまえが、タイムリープできるんだ？」

「それは……」

みゆきが少し、口ごもって、それから、言った。

「わたしが、未来人だから」

「……はあ？」

呆氣にとられて、慎也はそれ以上言葉が出てこなかった。ただ、  
「おまえが、なに？」

と呟く。

「だから、未来人。わたし、未来から来たの」

慎也はただ、呆けたようにみゆきの顔を見つめていた。

みゆきも、頬を赤く染めながら、それでも、しっかりと慎也を見つめている。

やがて、白かった世界に色と形が戻ってきた。

「あ、着いたよ」

みゆきはそういつて、ずっと抱きしめていた慎也の体を離れた。

そこは、学校の理科準備室だった。

慎也は、部屋を見渡した。いつか慎也が見た不思議な実験装置が  
テーブルの上に、所狭しと並んでいた。

「これは……」

ハッとして慎也は呟く。その声に、みゆきの声が重なった。

「そう。これは、あの時慎也が見たものだよ」

慎也がみゆきを振り返る。

「これって？」

「うん。タイムリープに必要な成分を分離してたんだ」

「こんなところで？」

みゆきは、ちょっと困った表情になった。

「ここは、ほんとに別次元なんだけどね。なんで、あの時慎也が入れたのかなあ。わかんないよ」

「そ、そうなのか？」

「うん。だから、焦っちゃった」

みゆきが、あははは、と弱く笑った。その笑顔を見ながら、慎也  
は、もう一度ハッとした。

「みゆき。おまえ、未来人って、ほんとなのか？」

「うん」

彼女が肯く。

「でも、俺達、幼なじみだろ。おまえ、ずっとこの時代にいたじゃないか？」

慎也は自分でも、そうじゃないとわかっていた。ただ、そうであつて欲しいと思つて言葉が口をついて出た。

「うん。私たちは、幼なじみだよ。それは本当」

「だったら……」

「聞いて、慎也。ちゃんと説明する」

みゆきは人差し指で慎也の言葉を制した。そして、話し出す。

「わたしね、子供の時に、迷子になったんだ。”時”の迷子に……」

その時、たぶん幼かつたわたしは、なにも分かっていなかったんだと思う。

うちにあつた、ある装置を偶然触ってしまったの。そして、わたしはこの時代に飛ばされた。

未来では、そんな事故の時のために、ある程度対策が施されていて、わたしにもまさかの時のための装置が持たされていた。

「覚えてる？」

みゆきが訊いた。

「初めて会ったとき、わたしがしていたイヤリングのこと？」

「ああ。赤い小さなイヤリングだった」

「それが、そうだったの」

みゆきは、それが緊急用装置で、異なる時代の人に、自分の存在を無理なく認めさせる効果がある、いわば、催眠術のようなものだった。

それと共に、本来は”時”の遭難者の位置を知らせる機能が備えられているはずなのだが、なぜか、その機能は効果を発揮しなかった。

おそらく、故障したのだろう。そのせいで、みゆきがどこに飛ば

されたのか、探し出すのに5年もの時間がかかった。

そして、彼らは、ようやく彼女を見つけると、連れ帰るために現れたのだ。

あの日、あの公園の帰りに。

「わたしも、びっくりしたの。もう、5年も経って、幼い頃の記憶が曖昧になっていたし。ここでの暮らしがすっかり身に付いていたから」

だから、未来に戻ってから、なんだかなじめなくて……

両親はとても優しく接してくれたけど、でも……

そういつて、みゆきは、少し俯いた。

「それで、戻ってきたのか？」

慎也が声をかける。

「うん。そうね。それもあるわね」

「それも？」

「ほんとね、一番の理由は……慎也と一緒にいたかったから」  
少女がにっこり微笑んだ。

慎也の心臓が、ドクンと跳ねた。

「俺と、一緒？」

「うん。だって、わたし……」

みゆきが慎也を見つめる。

「あなたのことが、好きだから」

その言葉で、慎也の胸がカツと熱くなった。うれしさが満ちてくる。

俺のために、戻ってきてくれたのか。

俺に逢いに来てくれたのか。

未来から。

「みゆき」

そういつて、慎也は、みゆきの両腕を掴んだ。

「慎也……」

みゆきが慎也の瞳を覗き込む。慎也はその瞳に惹き込まれるように言った。

「俺も、みゆきが、好きだ」

見つめるみゆきの瞳が揺れる。その瞳から、一粒の雫が流れた。

「みゆき？」

彼女は慌てて手で涙を拭う。

「ああ、よかった。慎也のその言葉が聞けて、もう、想い残すことはないな」

その言葉に、慎也は急に不安になった。

「想い残す事って、なんだよ？」

えへつと、彼女は微笑んだ。まるで涙を隠すように。

「えつとね、わたし、もう、ここにはいられないの。未来に帰らなきゃいけないの」

「な、なんでだよ？」

「……あなたに、知られたから」

「俺に？」

「そう。この時代の人に、自分の存在を知られたから、もう、ここにはいられないの」

「なんでだよ？」

「そういう約束なの」

「でも……だったら、また、もっと過去に戻ればいい。俺が、そのことを知らない過去に。それが、さっきいつてた機械で、俺の記憶を変えればいいじゃないか」

「それは、わたしの一存では、出来ないの。ほんとね、タイムリ―プも、そんなに簡単にしちゃいけないのよ」

「だけど、それなら、どうすれば……」

慎也は、焦燥感で、唇を噛む思いだった。

このままじゃ、また、みゆきと別れることになってしまう。また……。

「俺は、イヤだぞ」

慎也が低い声で言った。

「え？」

「俺はイヤだ。また、おまえと別れるなんて、そんなことイヤだ。あの日、公園の帰り道、連れ去られるおまえの姿を見て、どんなに俺が悔しかったか……思い出したぞ。なんで、忘れてたか知らないけど、もう一度、あんな苦しさを味わうのは、もう、ごめんだ」

慎也は、一気にそっぴい放った。その表情をみゆきは、じっと見ていた。

そして、彼女は、思いきったように言った。

「慎也、あなたは、わたしと一緒にいたい？」

「ああ。もちろんだ」

彼女が慎也に体を寄せる。

「待ってて、くれる？」

「もちろんだ、て、うん？待って、なにを？」

みゆきは慎也に体を預けた。

驚く慎也は腕を回して彼女を支える。

抱きかかえられた腕の中で、みゆきがつま先を伸ばした。

ふたりの唇が重なる。

柔らかく、温かい感触が、やがて離れた。

みゆきは、赤い頬で、花のように笑いながら、

「わたし、決めた。戻ってくる。この時代に住むために。この時代だけに住むために。あなたと一緒に……生きるために。だから……」

みゆきは、慎也の瞳を見つめ、力強く言った。

「未来で、待ってて」

「ああ」

慎也がそう答えたとき、

みゆきが弾ける笑顔を見せたとき、

まるで、魔法のように、みゆきの姿はかき消えた。

抱いていた慎也の腕の中から、彼女の体は消えてなくなった。

慎也は、それを驚きつつも、もう、悲しんではいなかった。  
心は繋がった。

約束は交わされた。

きつと、いつか、その約束は果たされる。

そう。俺は、未来で、待ってる。

慎也は、心にそう刻んだ。

おわり



## Ⅰ 最終話 - (後書き)

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。  
楽しんでいただけたでしょうか？

それでは、また、別のお話で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2229d/>

---

ラベンダーの香り

2010年10月8日15時33分発行